

石鎚山いしづちさん
(海量法師かいりようほうし)

遠遊千里渡天涯 南豫山川行路斜
獨有石鎚山色起 暮春三月雪如花

解説 この詩は、四国の最高峰石鎚山に采てその情景を詠ったものである。

遠遊えんゆう 千里せんり 天涯てんがいを 渡るわた

南予なんよの 山川さんせん 行路こうろ 斜めなななり

ひとり 石鎚いしづちの 山色さんしよくを 起おここす 有りあ

暮春ぼしゆん 三月さんがつ 雪ゆき 花はなの 如ごとし

語釈 ※遠遊||遠隔の地まで旅をすること。 ※千里||千里もある遠いところ。 ※天涯||非常に遠いところ。 ※南予||南伊予の略。現在の愛媛県南西部、八幡浜・宇和島二市と東・西・南・北宇和郡の範囲をさす。 ※行路||旅路。みち。 ※山色||山の景色、山光。 ※暮春||春の末。

通釈 千里の遠くまで旅をし、天涯の地に来た。ここ南予の山は切りたち、川はめぐつて道は斜めに続いている。ただ、石鎚山だけがすばらしい山の景色を表わしている。晩春の三月だというのに花のように雪が舞い降っているのだ。